

大雪山国立公園フォーラム 新たな管理運営体制で世界に誇れる山岳国立公園を目指す ～妙高戸隠連山・尾瀬の協働型管理運営体制に学ぶ～

【結果概要】

日 時：平成 31 年 1 月 28 日（月）

14：00～17：00

場 所：道北アークス大雪アリーナ多目的ルーム

1. 開会（大雪山国立公園連絡協議会会長 上川町長 佐藤 芳治）

2. 趣旨説明

■ 環境省上川自然保護官事務所 首席自然保護官 榎 厚生

「大雪山国立公園の協働型管理運営体制を目指して」

大雪山国立公園では、課題を解決して世界に誇る山岳国立公園を目指すため、既存の大雪山国立公園連絡協議会を拡充した総合型協議会の準備会を開催し、国立公園のビジョンを議論するなど、協働型管理運営体制を構築に向けた取組を進めている旨説明があった。

3. 事例発表

(1) 妙高戸隠連山国立公園

■ 環境省信越自然環境事務所 国立公園課長 玉谷 雄太

「妙高戸隠連山国立公園連絡協議会の取組・現状」

平成 28 年度に設立された妙高戸隠連山国立公園連絡協議会の経緯、体制、取組、ビジョンについて説明があり、同協議会の立上げ当初から積極的に運営に携わり、協働型管理運営の取組を実施している妙高市環境生活課長 岡田 雅美氏を紹介いただいた。

■ 妙高市環境生活課長 岡田 雅美 氏

「“温故知新、そして、日本一愛される国立公園”に向けた妙高市の取り組み」

妙高戸隠連山国立公園ビジョン（基本理念：温故知新、そして日本一愛される国立公園へ）のもとに実施している国立公園の保全に関する取組（ライチョウの保全、イネ科植物の除去）と、国立公園の活用に関する取組（良好な景観形成、一目五山の絶景 32 選等の情報発信、ロングトレイルの設置）について紹介いただいた。また、これらの取組を通じて、発信力の強化、顔見える関係の形成、人と人とのつながりやネットワークの形成などが、協働型管理運営体制を構築したことのメリットであると感じられた旨紹介いただいた。

(2) 尾瀬国立公園

■ 環境省片品自然保護官事務所 庄司 亜香音

「新・尾瀬ビジョン」について～「あなた」と創る「みんな」の尾瀬～」

平成 18 年に策定された「尾瀬ビジョン」の改定経緯と、平成 30 年 9 月に改定された「新・尾瀬ビジョン」の概要と具体的な取組のイメージや推進体制について説明があり、民間事業者

の立場で同ビジョンに対する取組を進めている東京電力ホールディングス株式会社 リニューアブルパワー・カンパニー 水利・尾瀬グループ課長 川崎 一弘 氏を紹介いただいた。

■ 東京電力ホールディングス株式会社 リニューアブルパワー・カンパニー

水利・尾瀬グループ課長 川崎 一弘 氏

「新・尾瀬ビジョンの行動理念実現に向けて ～尾瀬業務1年生の欲張り仕掛け～」

尾瀬と東京電力ホールディングス株式会社の関わりの経緯やこれまで継続的に取り組んできた木道の敷設や森をまもる取組などについて説明があった後、「新・尾瀬ビジョン」に対応する取組として、大清水湿原回復プロジェクト、低コスト式安全表示の試験実施などの取組を紹介いただいた。また、検討中のさらなる取組案もお話をいただいた上で、企業活動の方向性について尾瀬国立公園と共有できる点があったこと、協働型管理運営体制により行政機関との連携した取組が可能になったこと等のメリットを紹介いただき、大雪山国立公園関係者にも協働型管理運営体制の参画をお勧めするメッセージをいただいた。

4. パネルディスカッション

<テーマ> 「大雪山国立公園で目指す協働型管理運営体制について」

<コーディネーター> 北海道大学大学院農学研究院准教授 愛甲哲也氏

<パネリスト>

妙高市環境生活課長 岡田雅美氏

東京電力ホールディングス株式会社 リニューアブルパワー・カンパニー 水利・尾瀬グループ課長 川崎一弘氏

一般社団法人かみふらの十勝観光協会会長 青野範子氏

上川町産業経済課課長補佐 西木光英氏

環境省上川自然保護官事務所首席自然保護官 榊厚生

<概要>

(コーディネーター・愛甲氏)

今回のフォーラムは協働型管理運営体制をテーマとしているが、そもそも我が国の国立公園制度は、米国や豪州等の国立公園とは異なり、国有地だけでなく公有地や私有地も含めて指定して、地方自治体、事業者、住民等が協力してする管理する制度として構築されているため、国立公園の制度ができたときから既に協働型の管理運営を行うこととなっていると言える。

一方、平成26年に環境省が設置した有識者の検討会により協働型管理運営体制を推進する必要性が提言されたが、このことは、地域が抱えている問題、さらに地球環境問題など新たな課題に対応するために、既にある協働型管理運営体制の範囲や内容をグレードアップして行こうという動きであると理解できる。

今日の岡田さん、川崎さんから示唆に富んだ事例を発表いただいたが、はじめに、その内容に関して、青野さんと西木さんから、感想や質問、また大雪山国立公園での課題などがあれば伺いたい。

(青野氏)

6年前から実家の旅館、十勝岳温泉湯元凌雲閣を経営しているが、日本人だけでなく海外の入山者が増えている。これまで冬の1月、2月は休業期間だったが、現在は、海外からのバックカントリーのスキー客が宿泊する期間となり、宿泊に占める外国人の割合は90%である。そのため、冬の安全管理、特に外国人向けの安全管理が課題であると思う。特に妙高戸隠連山国立公園の事例にあった「顔

の見える管理」が今後は必要だと感じ、顔の見える関係を築きつつ、民間事業者としてはこれから自分の庭先のところから、管理に協力していこうと思った。

(コーディネーター・愛甲氏)

安全管理については関係機関との連携も必要であると思うが、その観点から苦労話などあるか。

(青野氏)

1週間ほど前に十勝岳で香港人が2人遭難したが、うち(凌雲閣)の宿泊者で、通報したのは私である。ちょうど3日前に警察署、消防署、山岳関係者と飲み会をしていて警察の方と電話番号の交換をしていたのですぐに連絡して、想定される利用ルート情報などを提供し、翌日の捜索開始から30分で発見することができた。顔の見える関係がとても大事だと感じた。

(コーディネーター・愛甲氏)

具体的な事例をお話いただき、良かった。私が携わっている活動の関係で言うと、昨年度の「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」に際しては、環境省はじめ札幌の山岳会、美瑛町や上富良野町、そして登山口の観光協会や各旅館・ホテルに協力いただいた。その時にもまさに顔の見える関係を作って連携することが重要だと感じた。

次に、自治体の立場から西木さんはいかがか。

(西木氏)

上川町で観光振興を担当する立場から、現在の状況や課題をお話したい。近年、旅行形態が変化し、インターネット等の普及によりロコミ等が旅行先の選択に影響を与えている。層雲峡地区は北海道有数の観光地として発展を遂げてきたが、こうした状況変化の中、入込数については苦戦が続いている。今後は素晴らしい自然環境に加えて、文化・食・地元との交流等を含めた滞在型観光を進めて行くこと、また、ガイド同伴が必要な場所を設けて、そうした場所を利用するためのルールづくりも必要であると考えている。

妙高市の岡田さんの発表の中で、景観に関する勉強会を行い廃屋の問題に取り組んでいる旨紹介があったが、解決の考え方のようなものが見いだされたのかお伺いしたい。また、尾瀬の事例についてはボランティアやガイドも含めて民間によるミズバショウの植栽活動が印象的だったが、東京電力の川崎さんには、尾瀬では民間のマンプワーがどの程度期待されているか、また、逆に民間として自治体からの関わりにどの程度期待されているかなどをお伺いしたい。

(岡田氏)

廃屋は全国的な問題で、法的には個人の資産であり行政がなかなか手を入れられないのが現実。危険防止の観点があれば行政は手を出せるものの、具体的にはそこまでは踏み込めていない状況。国立公園内では景観面からもう一步踏み込めないかとは感じるが、今後検討が必要と感じるところ。

(川崎氏)

民間ボランティアの活用については今回が初めての取組であり、今後その結果をどのように活かしていくかについては、現在、検討中のところ。一方、自治体との関わりとしては地元の村長さんや環境省に活動へ参加をいただくなど連携した取組を進めることができているありがたい。

(コーディネーター・愛甲氏)

東京電力さんは土地所有者として国立公園に関っているとのことであるが、色々な取組を考え、地元の皆さんを巻き込んで行こうとする時の、会社や川崎さんご自身のモチベーションがどこにあるのだろうかということをお伺いしたい。

(川崎氏)

尾瀬の協議会はそれなりに成熟していて、協議会は全体的な取りまとめはするが、それとは別に何か個別のことをやりたいとか課題があると思ったら、関係者で集まり話をし、どんどん協力して進めていく所があると感じている。このような状況の中で、私個人としては関係者を皆「仲間」だと思っている意識がある。

(コーディネーター・愛甲氏)

今の話は課題を共有したりアイデアを出し合ったりする仲間が出できているということで、非常に良い話だと思う。今までの話を受けて榊さんに、新たな協働型管理運営体制は今までと何が違うのか、新しいステージに上がろうとしている思いも含めてコメントをお願いしたい。

(榊)

現状の体制では、山岳地域での登山道の荒廃問題の解決でも、利用拠点でのエコツーリズム推進でも、限界があると感じている。例えば、登山道については、既存の大雪山国立公園連絡協議会では行政の集まりなので、対応できることは管理に必要な行政手続の推進や予算に関する部分のみ。一方、今必要なことは利用者が管理に参加していただくことなどで、そのためには民間の方と協力して人を集めたり、民間資金を集めたりと、民間との連携が必要になってくる。

また、エコツーリズム推進については、行政でできることは計画づくりや地域ルールづくりといういわば器の部分であり、必要なのはそれに加えて人材育成、人の呼び込み、情報発信であり、これらは、観光、地域振興、交通事業など分野の方が得意とするところ。

このように考えると、課題解決には行政だけではできない部分がたくさんあるため、色々な立場の人が共通の目標をもって参加して取り組んで行くことができる枠組みが今こそ必要である。

(コーディネーター・愛甲氏)

ここで大雪山へのアドバイスを岡田さんと川崎さんをお願いしたい。

(岡田氏)

大雪山の広大な山岳景観および温泉、峡谷、湖などは北海道特有のものであり世界に通用するものだ。協議会の目的として滞在型のエコツーリズムで地域の活性化を図ることがメインになると思うが、大雪山のブランドを大事にしてもらいたい。大雪山のブランドも各々の方が唱えているだけではなく、一元化して発信することが大事である。

(川崎氏)

大雪山は日本一大きな国立公園であり、つまり、日本一のポテンシャルを持っているということの意味する。そのポテンシャルをどのように生かしていくかが重要であると思う。大雪山の協議会に望むのは、5年後10年後に大雪山国立公園協議会で構築した素晴らしい運営方法を、是非とも尾瀬にご教授いただきたいということ。

(コーディネーター・愛甲氏)

プレッシャーを頂くと同時に、参考になるお話をいただき感謝。最後に西木さんと青野さんには、大雪山ビジョンや協議会に期待することについてお伺いしたい。

(西木氏)

上川町でも、世界に誇る山岳リゾートを目指すことを目標にしている。具体的には大雪山大学という市民交流型事業で直接大雪山の自然に触れ、大雪山からの恵みの水や食の部分で大雪山の価値をしっかりと将来に引き継いで行く取組をしていきたい。

また、総合型協議会に期待するものは、自治体だけではできないことで民間の方々と一緒に取り組

める部分について、顔を突き合わせ情報を共有しながら進めて行けること。

(青野氏)

大雪山のシンボルマーク作りをしたら皆で目指すものが一つ形に現れると思う。十勝岳方面にはビジターセンターが無いので、民間として山の安全や滞留の拠点を作れたらと思う。尾瀬では民間が主体的にやっていると聞いたので、大雪山でも民間の立場でできる範囲で実現したい。

(コーディネーター・愛甲氏)

これまで大雪山では、概念的な話が多い中で妙高戸隠連山、尾瀬国立公園から具体的な話を頂いたので、具体的にイメージでき始めたと思う。2月には準備会の2回目の会合が予定されているので、本日の話が参考になると考える。ご登壇いただいた皆様本日はありがとうございました。

5. 閉会（環境省北海道地方環境事務所 統括自然保護企画官 大林 圭司）

大雪山国立公園フォーラム

新たな管理運営体制で世界に誇れる山岳国立公園を目指す ～妙高戸隠連山・尾瀬の協働型管理運営体制に学ぶ～



開会の挨拶
大雪山国立公園連絡協議会 会長
佐藤 芳治 上川町長



「“温故知新、そして、日本一愛される国立公園”
に向けた妙高市の取組」
妙高市環境生活課長 岡田 雅美 様



「新・尾瀬ビジョンの行動理念現実に向けて～尾
瀬業務1年生の欲張り仕掛け～」
東京電力ホールディングス株式会社 川崎 一弘 様



パネルディスカッション「大雪山国立公園で目指す協働型
管理運営体制について」
コーディネーター：
北海道大学大学院農学研究院 愛甲 哲也 准教授



閉会の挨拶
環境省北海道地方環境事務所
大林 圭司 統括自然保護企画官



会場の様子(参加者66名)